

長野県上田市の「無言館」を訪ねて

念願かなって、8月末に長野県上田市にある『無言館』を訪ねることができました。『無言館』は、第2次世界大戦で命を失なった東京美術学校（現・東京藝術大学）、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学と現・多摩美術大学）に在籍していた学生たちの絵を主に展示している戦没画学生慰霊美術館です。美術学校の学生ばかりではなく、独学で絵を学んでいた絵描きの卵たちの絵も展示しています。

本当は昨年夏に妻と共に訪ねる予定でしたが、新型コロナの拡大のために断念しました。今年は念願かなって行くことができましたが、妻は仕事の関係で行けず、一人旅となりました。美術館に行く2日前の土曜日に、STV（日本テレビ系）で『スペシャルドラマ「無言館」』が放映され、さらにモチベーションが高まりました。

そのドラマは、洋画家の野見山暁治氏の影響を受けて、実際に『無言館』を設立した窪島誠一郎の物語でした。（窪島は作家・水上勉の息子さんです。）

窪島は野見山から「全国を旅し、戦争で命を落とした美術学校時代の仲間の絵と一緒に見に行こう」と誘われました。出征直前に描かれた絵がどんな絵なのか興味を持って、一緒に行くことにしました。窪島は、戦没画学生の絵が「あまりに普通」だったことに逆に心をひかれ、戦没画学生の絵を全国から集め、設立されたのが『無言館』でした。

私はJR上田駅から電車とバスを乗り継ぎ『無言館』に着きましたが、バスに乗った客は私を含めて2人でした。2日前に全国テレビで放送されたので超満員で乗車できなかったらどうしようかと心配しましたが、杞憂に終わりました。しかし『無言館』に入場してみると、いっぱいでした。ほとんどの方が年配の夫婦で、自家用車で来ていました。さっと見ると10分もかからずに見終われる美術館でしたが、遺品や解説・エピソードなどをじっくり読みながら何度も何度も絵を見ると1時間くらいかかりました。

私は、享年26歳の伊澤洋氏が描いた『家族』（家族団らんの様子を描いた絵）の前に立つと、なぜか涙がこみあげてきました。どちらかという絵を見ても感動するタイプではないのですが、この時は涙がとまらず、マスクの下で何度も鼻をすすっていました。一見幸せそうな家庭、テーブルにはティーカップが並び、お皿にはリンゴやみかんなど果物がのせられていました。裕福な家庭にみえましたが、実兄によると、とても貧しい農家で家族が揃ってくつろぐことはなかったそうで、出征前の弟の想像の産物とのことでした。出征直前にどうしてこのような家族の絵を描いたのか？…思いめぐらしていくうちに、なぜか涙がこみあげてきました。

2022年8月31日（水）



『家族』



『無言館』